

環境が育む教育的風土と人間の資質

— タイの文化と教育の現状について —

前バンコク日本人学校 教諭

埼玉県川越市立武蔵野小学校 教諭 矢部 智史

キーワード：国際理解，環境と教育，教育的風土，タイの教育

1. 研究の視点

- (1) タイの歴史や文化，風土に裏打ちされたタイ人の人間性と教育的価値観について検証する。
- (2) タイの教育の現状にふれ，タイ・日本それぞれの教育を比較しながらそれぞれの課題にせまる。

2. 研究仮説

タイの人々のくらしや文化を見つめ，教育のバックボーンを明らかにすると共に，実際に現地校に赴き，児童生徒と向き合えば，その国の教育や文化が作り上げた人間性や学びの価値観を感じ取り，日本と比較しながらタイの教育の現状について考察を深めることができるであろう。

環境が教育に与える影響は大きい。日常生活を支配している文化，そこから派生しているものの見方や考え方は，教育のあり方そのものを形成していると言っても過言ではない。人は，衣食住の上に生き，家族や地域社会を形成し，長年にわたり伝統や文化を築いてきた。その国の教育の実態を明らかにするためには，人々のくらしや文化を見つめ，バックボーンを明らかにすると共に，実際に現地校に赴き，児童生徒と向き合うことで，その国の教育や文化が作り上げた人間性や学びの姿勢を感じ取り，日本と比較しながら，タイの教育の現状について考察を深めることができるであろうと考えた。また，異国の地で実際に生活していると，気づかぬうちに日本文化と比較していることが実に多く，タイの文化を考える上で大きな動機付けとなっている。自己の五感をフルに活用して本研究を進めてみた。

3. 現地における教育実践

(1) カルラースラングサン小学校における授業実践と考察

① タイ東北部の概観

イサーンとよばれるタイ東北部は，北はメコン川を境にラオスと接し，南はカンボジアと接する地域である。水牛が歩き，のどかな田園風景がひろがっている。

6世紀にメコン川中流域にクメール人によってカンボジアがおこり，この地域を支配した。さらに802年，ジャバルマン2世によりクメール帝国（アンコール朝）が開かれ，この支配を長く受けていたため，ヒンドゥー教の影響を強く残している。また，隣国ラオスとの関係が深い。ラオスでは，1353年頃にランサン王国が成立した。ランサンとは「百万頭の象」という意味で，この王国をつくったファークムは，ルアンプラバンという小国（タイ人の国）の王室の子孫といわれている。ところが1707年，ランサン王国は，ピエンチャン王国とルアンプラバン王国に分裂，さらにピエンチャン王国からチャンパサック王国が分裂したために，ラオスは3王国となった。このあと結局3国はタイとベトナムに占領されてしまった。ところが，1907年，タイの領土であった現在のラオス，カンボジアをフランスに譲ったため，今度はフランスの植民地支配を受けることとなった。さらに1941年には進駐した日本軍の支配下に入った。1953年にラオス王国は独立し，現在に至る。ラオスと密接に結びつくイ

サーンの歴史遺産には、このような歴史からヒンドゥー教や仏教、フランスや日本の影響が複雑に絡み合う。さらに、ベトナム戦争の爪痕も残っている。

こうした経緯を経て、イサーンに住む人々はバンコクに住むタイ人とは違った人間性を育むこととなったのである。

② 授業実践

カルラースラングサン小学校全校児童は、児童数188人で各学年1～2クラスの小さな学校である。木造の校舎が2棟並んでいた。ほとんどの子どもたちが、学校周辺に住んでいる子どもであるが、親が共働きだったり、親が出稼ぎに出ていて親戚に預けられていたりするなど、複雑で家庭の問題も多いと聞いていた。

日本人教師を受け入れたことのないタイの現地校で、私は小学校6年生26名を対象に、「日本の国土と日本文化―ちぎり絵を通して―」というテーマで授業実践を行った。地図を使いながら、日本の地理的特色や気候について説明すると共に、ちぎり絵を制作しながら、日本文化の良さをタイの児童に伝えることを目標とした。

③ 考察

2006年8月11日当日、訪問先では朝からワン・デー（母の日）の行事が行われていた。地域の教育関係者や名士がずらりとそろい、母親の中から数名が「良い母親」として表彰されていた。しかも、「良い母親」を選定するのは担任の仕事だと聞いて愕然とした。次に、来校していた母親1人1人がステージに上がって座り、その前に児童1人1人がひざまずき、感謝の意を表す儀式が行われた。出稼ぎ等で母親がいない家では、祖母が来ていた。また、身寄りのない子どもたちには、担任教師が母親代わりになっていた。母親を敬う儀式を目の当たりにし、感慨深いものがあった。

子どもたちは朗らかで人なつこく、とても礼儀正しかった。こちらがタイ語理解に苦慮している中、コミュニケーションを取ろうと一生懸命話しかけてくれた。授業中も一生懸命取り組んでいた。薬品を使った授業には、児童ばかりか現地校の先生方まで目を輝かせ、必死にメモを取る姿が印象的であった。おそらく、こうした授業を目にするのは初めてだったに違いない。

私たちは日本で、ここでの実践と同じような授業を展開している。当たり前のように実験器具を使い、教材・教具を用いて行われる授業。しかし、教師に向けられる尊敬の念、授業に参加する子どもたちのこれほどまでに輝いた目を見たことはあるだろうか。もし、かつての日本にこうした教育現場の光景があったとすれば、日本人は何か大切な物を失ってしまったといえるだろう。それが低下したモラルのせいなのか、家族制度の崩壊、無宗教的な現実のせいであろうか。精神的にも大きなショックを受けた1日だった。

(2) ムスリムサンティタムウラニティ学校における授業実践と考察

① タイ南部（ナコンシータマラート）の概観

ナコンシータマラートはタイ南部最大の都市である。その地理的条件から、この町には仏教・ヒンドゥー教・イスラム教などの宗教文化が混在している。山田長政の終焉の地であって、第二次世界大戦にも関係の深い町であるにもかかわらず、訪れる日本人はほとんどいない。

近年、宗教的対立から殺人やテロ等の犯罪が多発し、タイでもっとも危険な場所の1つである。そうした状況から、住民や子どもたちの精神的不安は大きいことが予想され、授業の実践においても配慮すべき事項と思われた。

タイ南部はマレー半島に位置する。西海岸にはマングローブ湿地が続き、東海岸には白い砂州が発達する美しい海岸線が見られる。南に行くにしたがって熱帯雨林が広がる。プーケットなどのリゾート地は、世界的にも有名である。タイ産のゴムの90%、ココヤシの50%は南部で産出されている。主要品は錫である。6～7世紀になってマラッカ海峡ルートが開かれるまで、東西交易はこの半島部を横断する形で行なわれていたため、錫の採掘も5～6世紀から行なわれていた。香料も重要産出品であった。

ナコンシータマラートでは、1400年前ごろより南インドの商人が渡来し交易をしながら、バラモン教などを伝えていた。1200年前には、シュリヴィジャヤ国の一国に所属し、中国の古書では「単馬令」として登場する。この時代、ナコンシータマラートは、南タイからマラヤのゲター、クランタン、パハンの国12カ国を支配していたとして、12支の動物になぞらえて県のマークとしている。スコータイ王朝が起ると、スコータイに帰属し、続くアユタヤ王朝にも帰属していた。アユタヤがビルマに滅ぼされたとき、3年間独立したが再びトンプリー王朝、ラタナコーシン王朝に帰属し、南タイの一県になった。

ナコンシータマラートは、バンコクの南、陸路1137Km、鉄道845Kmに位置する。東側はシャム湾に面し、海岸線が225Km続いている。西側は山岳地帯で、海と山の間に豊かな平野部がある。稲作を主とし、米は他県に輸出している。ゴム園経営、ヤシ、サトウキビ、コーヒー、ドリアンの栽培が盛んである。錫、水晶、宝石も産出する。海産物も豊富である。独立王国として南タイを広く支配したこともあって、洗練された工芸品を作り出している。銅を主とする金属に黒地に金や白の模様を入れて制作した腕輪、ヘアピン、ロケット、容器、盆などのニエロ細工、牛やヤギの皮に細かい穴をあけて作る影絵芝居ナン・タルンの人形、野生のツル性植物ヤーンリパオで細かく織り上げたカバン、バックなどが、特産品として有名である。

② 授業実践

2007年8月7日、イスラム教徒のムスリムサンティタムウラニティ学校を訪問した。同校は70年以上の歴史があり、交流基金をもとに、公立学校として現在に至っている。児童・生徒数は、2700名（小学部28クラス、中学部36クラス）を超え、南部最大の学校規模を誇る。幼稚園部（200名）も併設されている。学校全体は活気に溢れており、みんな笑顔で迎えてくれた。学校の様子は日本のそれとあまり変わらず、休み時間に校庭で遊ぶ者やグループで歓談する者など仲良く生活する姿が見られた。私が今回、担当した学年は中学1年生であったが、1学級40人程度で男女が分かれているクラスと、20人程度で男女混合になっているクラスがあった。また、習熟度別にクラス分けがなされているようであった。校舎自体も男女で分かれていた。

男女混合のクラスは担当教職員の姿が見えず、始業の時間になっても生徒がそろわなかった。ばらばらと集まり、授業を開始したのは10分後であった。座る位置も一応決まっているようであったが、一体感がなく、どこか締めりのない感じがした。日本人に対する興味や授業に対して興味津津な生徒が多い中、授業に前向きに取り組めない生徒もいた。対応に苦慮したが、皆人なつこい性格でこちらの働きかけには笑顔で応じてくれた。

授業実践をしたもう一方のクラスは女子のみ40人で、教室に入った時から前述のクラスとは明らかに何かが違うと感じた。学級担任がおり、始業前には全員が着席していた。挨拶が一斉になされ、きちんとした身なりと態度が印象的だった。授業に対しての集中力も高く、積極的に活動する生徒が多かった。教室の掲示も工夫が見られ、学級を取り巻く全ての要素が洗練されており、質の高さを感じた。

③ 考察

「2004年、タイ政府が国軍とイスラム系住民の衝突で治安悪化が進行している南部三県に一億羽近い折り紙の鶴を空から投下し、和解と平和を訴えた」この事実を知ったのは、ちょうど授業実践を終えて間もなくのことであった。

タイ南部の治安悪化は、想像以上に深刻である。2006年5月には、タイ最南部ナラティワート県で、仏教徒の女性教師2人を人質に取った立てこもり事件が発生し、治安状況を懸念した小中学校約200校が22日から休校に入った。最南部では武装組織と国軍・警察との衝突が続き、04年以降1300人以上が死亡、住民が暴徒化するなど状況が悪化している。事件は、イスラム系住民約200人が19日、教師2人を人質に小学校に立てこもり、海兵隊員が殺された事件で逮捕された容疑者2人の無実を主張して釈放を要求した。約2時間後に警官隊が突入して2人を救出したが、1人は暴行を受け、重体のままだった。事件は地元の教師たちに衝撃を与え、多くの教師が出勤を拒否していた。

そのような状況の中で、ムスリムサンティタムウラニティ学校では、学校運営が平然と行われているように思えた。教育は国家の要、教育こそがいかなる場合においても優先されるべきものと位置づけられているようだった。子どもたちはみな笑顔で、明るく、恐怖や不安に怯えているような素振りは見られなかった。日本人にはない力強さと陽気さが感じられた。

授業開始後、折り紙で折り鶴を折ろうとした時、知っているかと尋ねたところ、2割程度の子どもたちが知っていると言った。その時、理由は分からなかったがとても不思議な気持ちがあった。日本の折り鶴とはやや形が違っていたので、日本式の折り鶴はこうだと教えたが、日本における折り紙文化や折り鶴の由来を説明したときは、興味深そうに聞いていた。「平和」のシンボルとして、折り鶴が日タイ両国の中で位置づけられていたことは驚きである。

ムスリムサンティタムウラニティ学校の教育は、高いレベルの人材育成を目指していることが感じられた。しかし、一方では、完全に習熟度別に学級が分けられ、上位には質・量共に優れた教育を提供し、下位のクラスの子どもたちは放任的に扱われている節がある。日本の公教育にはないスタイルは、一見差別的にも感じられたが、逆に「選ばれし者」の学力伸長が、国際的に目を見張るものとなり、日本の教育力をしのぐ成果を挙げることが想像できる。タイの国家が教育に求めていることと、イスラミック的価値観が見事に融合して、教育が行われている一例だと感じた。

4. 研究のまとめと考察

これまで、歴史と文化がそこに住む人間の人間性と価値観にどれほどの影響を持っているのか、また、環境が教育的風土と人間の資質にどれだけ影響があるのかを探ってきた。タイには、タイ独自の歴史や文化、宗教観が存在し、日本は日本独自の文化を築き上げてきた。そのことが「教育」のあり方にも反映されているのは、至極当然のことである。

タイの教育事情も、南部や東北部、バンコク都内と、それぞれの地域でそこに生活している人々の人間的価値観を色濃く反映していると感じた。同じタイ国内にあっても、宗教上の違いや経済格差、地理的環境や風土、歴史によって、学校教育の形態も、地域の教育力も違っていった。日本国内ほど質・量共に同等の教育を受けているとは、到底考えられない現状がある。しかし、タイにはタイ独自の歴史や文化があり、教育が長い年月に育まれた国民性を向上させるねらいがあるという点においては、日本もタイも全く同じだと感じた。日本の教育技術がタイと比べて勝っている訳でもなく、単純に教育的価値観を普遍的なものとして、両国に当てはめることは正しくないと感じた。

タイに比べ、日本の教育力が非力に思えたのは、「道徳」についてである。もっとも、犯罪発生件数からすれば、日本は世界有数の「道徳的国家」と言える。タイの犯罪発生率は高い。しかし、タイの子どもたちの年配者や親に対する敬愛の念、教師に対する子どもたちや保護者からの敬愛の念は、実に深い。日本の家庭の教育力の低下が指摘されてから久しいが、こればかりは日本の独自性を強調するわけにはいかない。

また、タイという異国の地で国際理解教育が容易に思えていたのは大きな誤りであった。「閉鎖的」と言われる日本人気質がバンコクで渦巻き、タイに居ながらタイ人とのコミュニケーションがほとんどないという環境を生み出した。壁を取り払い、真の国際理解教育を展開するには思いの外ハードルが高いが、逆に背伸びをせずに「人間」というもっとも当たり前のカテゴリー・・・共通項の中で接点を見出せば、いずれ相互理解に結びつくのではないかと感じた。